



[令和元年7月10日 定例会発表要旨]

## 手稲の交通史 あれこれ

文筆家（稲穂在住） 田中和夫氏

1700年代の後半から、カムチャッカを手中にしたロシア人は千島列島へ南下し、次いで樺太へとやってきて日本人の住居・番屋を襲って焼き払い、物資を奪い、番人を捉えるという事件が頻発した。幕府による鎖国政策のこの時代、国境が判然としないまま日本人とロシア人が雑居混在したがための紛争だった。ロシアの南下政策はさらに進み、紛争は蝦夷地の宗谷、利尻にまで及んだ。事態の急変を知った幕府は蝦夷地に目付役らを派遣し、調査・報告させた。大船も持たず、防備についての人材も資力もなく、海岸部に人が住み街も作られているが街と街とを結び陸上交通には見るべきものがない小藩 松前藩に、蝦夷地を任せてはおけない、という幕府の決断で蝦夷地の行政一切は幕府直轄で行うことになった。



そこで決められたのが松前藩の陸奥梁川への移封と、庄内、南部、仙台、津軽、会津、秋田の奥羽有力6藩による蝦夷地警備だった。箱館に奉行所を置いた幕府は北辺防備の必要上から道路の開削を重視し、場所請負人や篤志家など民間人の自費開削をも要請するなど、幕府の統治期間中、道路の開削が大いに進められた。日本海沿岸の西蝦夷地だけを見ても、黒松内山道といわれる長万部一磯谷間、磯谷一岩内間の雷電嶺山道、岩内一余市間の岩内山道、余市一小樽一銭函間の海岸道路のほか、札幌越新道といわれる発寒山麓経由の銭函一千歳間が開かれている。この幕府直轄支配は1807（文化4）年から始まり、各藩分治も22年間にわたって続くのだが、やがて1854（嘉永7/安政元）年、日米和親条約に続いて日露和親条約が結ばれ、樺太と千島の国境問題も解決する。

そして1868（慶応4/明治元）年、幕府が崩壊して明治政府が成立。翌1869（明治2）年、開拓使という政府直轄の役所が設けられ、これまでの蝦夷地を北海道に改称、いよいよ北海道の開拓が始まる。同年10月、開拓使の札幌本庁在勤を命じられた島義勇判官が札幌へ赴任。まず銭函に仮役所を置き、その後、札幌に出て本府造りに取り掛かると同時に、銭函一札幌間の道幅10間の道路開削工事に着手する。銭函から星置坂までは獮師によって踏み分けられた道はあるが、深い原生林の中



「銭函小樽間カモイコタン新道着手前ノ道」

—1879（明治12）年頃撮影／北大附属図書館所蔵写真—

では正確な計測もできず、ついに夜間、銭函と円山の双方で狼煙を上げて互いの位置を確認し、樹々を伐採しながら計測をする。だが翌年2月、路線は予定とは異なる低湿地帯に入っていた。積雪寒冷の中での作業は完全に失敗で、工事は中止。着任3カ月で1カ年分の予算を使い果たした島判官は更迭となり、東京へ戻っていく。

島判官が東京へ戻った1870（明治3）年、開拓次官に黒田清隆が就いた。西郷隆盛、大久保利通に次ぐ薩摩藩の実力者だった。8月に樺太へ渡って実情調査をした結果、樺太は3年とは保てないと断言し、開拓の在り方について大きな編成替えを提言する。さらに、今最も急がれるのは人民を北海道に移住させ、道路を開くことだと断言した。

中断していた銭函―円山間の道路工事が再開され、1872(明治5)年に竣工。軽川街道と呼ばれた区域も ほぼ同時期に開通している。その三樽別には通行屋が工事中から設けられていた。小樽―札幌間を通行する人たちの休憩所、宿泊所である。ここを流れる三樽別川は、中の川、追分川に合流して琴似川を通じて石狩川に合流。篠路、元村に行くには都合がよい場所だった。

軽川街道は当初の計画では直線的な道路設定だったが、星置の急峻な地域を避け、山裾や湿地帯を避けて迂回する道路になっている。

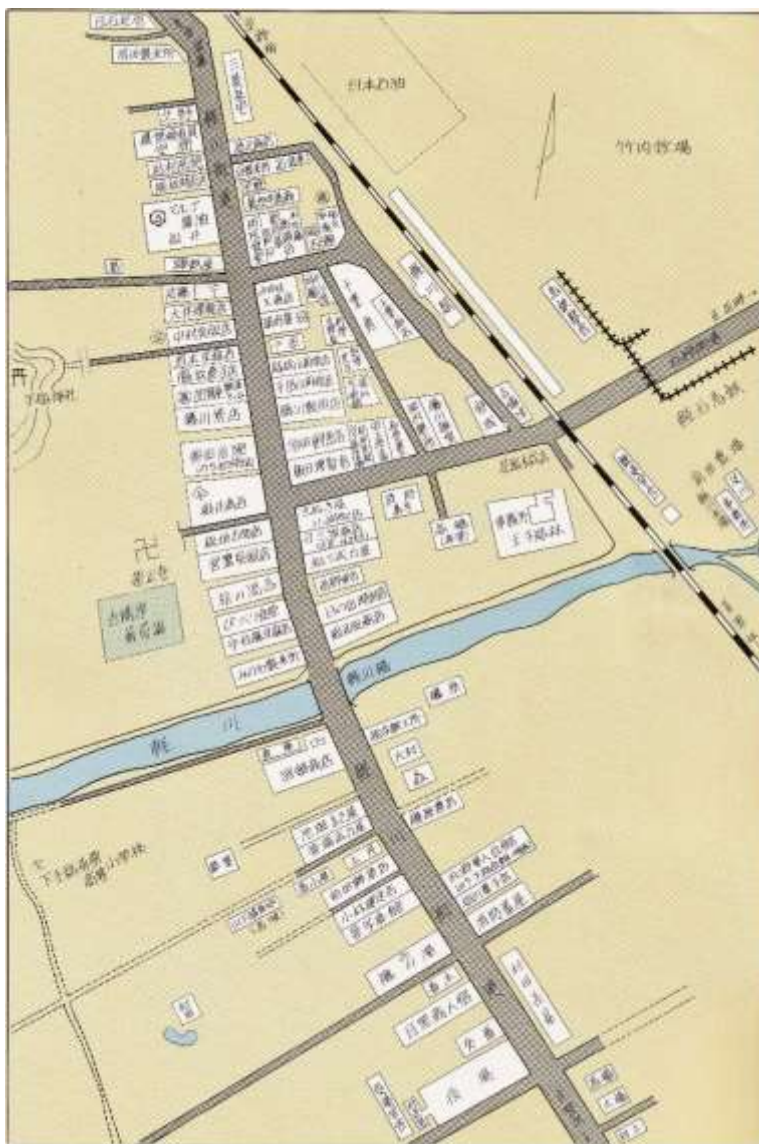
1872(明治5)年には黒田次官(のちに長官)が強く求めていた「開拓使10年計画」が実施された。屯田兵村の創設、道路・鉄道・港湾・炭鉱の開発と建設、ビール・ワイン・紡績工場の建設など、北海道開拓に欠かせないものすべてが含まれていて、これを毎年100万円、10年間に1,000万円を開拓使事業に支出するというもの。

「開拓使10年計画」によってこの時代、産業が続々と誕生する。麦酒醸造所、葡萄酒醸造所、製糸所、製糖所、鮭・鹿肉缶詰製造所等で、このように産業が興れば 原料の搬入、製品の輸送が必要になる。もちろん移住者も欠かせない。

1879(明治12)年12月、手宮―幌内間の鉄道建設が決定し、敷設作業が急ピッチで進められた。手宮―札幌間の開通は1880(明治13)年11月で、軽川簡易停車場は翌年の1881(明治14)年11月に設けられた。1884(明治17)年8月には 旅客、荷物、貨物を取り扱う一般停車場に昇格し、本屋停車場落成。1891(明治24)年には 停車場の増改築と構内線増設。1934(昭和9)年には 山小屋造りの新駅誕生と続く。



「張碓村隧道(小樽ノ方ヨリ見タル景)」  
—1879(明治12)年撮影/北大附属図書館 所蔵写真—



大正末期の軽川街道の図〜停車場と街道の家並  
—札幌市教育委員会編・さっぽろ文庫別冊『札幌歴史地図(大正編)』より—

同じ年には 札樽国道 銭函―円山間の改良工事が完了した。軽川街道の富丘から稲穂の祥龍寺までの延長2kmを新道開削し、直線化したのである。そこは島判官が手掛けた一部分だった。

—— 蝦夷から北海道に改まって150年。その一部を述べさせていただきます。

次回予定 ⇒ 手稲鉱山の変遷 / 林 俊一(手稲郷土史研究会 会員) / 9月11日(水)18:15~ / 手稲区民センター 視聴覚室

## ● 共催事業案内

## 「新川フットパス&川下り」へのお誘い

手稲郷土史研究会では、「新川流域を楽しくする会」(事務局：当研究会内) および 前田連合町内会との共催で『新川フットパス&川下り』を次のとおり実施いたします。「前田森林公園橋」(前田 10 条 16 丁目) から新川河口(オタネ浜)までの往復約 8km、河口では「オタナイ発祥之地碑」など周辺の歴史を辿るとともに 貴重な海浜植物などの観察も行います。少雨決行。定員はとくに設けていません。皆様のご参加をお待ちしています。なお、川下り体験は、「前田森林公園橋」ー「第一新川橋」(手稲山口)間の往復となり、河口までは行きません。

- 実施日 / 9月7日(土) 9:00~15:30 (8:30 集合)
- 集合地 / 「前田森林公園」新川側広場
- 参加費 / 1,000 円(保険料込み・当日集金)
- 行程 / ① 9:00 「前田森林公園橋」出発  
② 10:30 新川河口 到着  
③ 12:00 砂丘にて昼食(昼食・敷物は各自持参)  
④ 13:30 新川河口 出発  
⑤ 15:00 「前田森林公園橋」帰着・解散



オタナイ発祥之地碑

- 申込み / 手稲郷土史研究会定例会にて回覧の申込書に記入、もしくは新川流域を楽しくする会事務局(☎684-3654=兼FAX または 090-9433-3841)あて、氏名、住所、連絡先(電話番号・携帯番号・メールアドレスなど)、年齢、内訳(フットパス・川下り体験の別)をお知らせください。また、カヌーやカヤックを持参できる方は、その旨ご連絡願います。8月31日(土)締め切り。詳しいお問い合わせは上記へ。

### 遺構・遺物は語る

#### 鉱夫住宅跡

「手稲鉱山」の関係者は、鉱夫を中心に朝鮮半島出身者を含めて最盛期には 2,000 人ほど、家族を入れると 10,000 人にも達する人々がいたと言われている。

したがってその住宅も、国道 5 号線そばにあった幹部職員のものから始まって、手稲山の中腹(三ツ山)近くまでビッシリ建てられた。とくに鉱夫の住宅(労務者社宅)が多く、滝の沢~万能沢までの間に 114 棟 648 戸、合宿所 8 棟 149 室という規模だった。そしてこれらの住宅は、ほとんどが平坦ではなく急峻なところに造られたものであったため、土地を平らにせねばならず、石垣を築いてから住宅を建てたというところもかなりあった。

写真の石垣もその一つである。「乙女の滝」の近くの道路際(現エコマネジメント株式会社に至る道路)に見られ、当時築かれた石垣が、閉山からまもなく 50 年が経とうという今も、崩れない状態で残っている。



今も残る鉱夫住宅の石垣

また「乙女の滝」に行く途中には、石垣ではないが、廃墟となった住宅の基礎の部分が草木に覆われながらもコケむした状態で、累々と残っているのが確認できる。

その状況は、まさに「夏草や<sup>つわもの</sup>兵どもが夢の跡」といった状況で、かつての栄華が偲ばれると同時にまた、鬼気迫るものも感じられる。

村元健治 (手稲郷土史研究会 会員)

## 視察研修ツアー「フゴッペ洞窟と知られざる小樽市」のご案内

手稲郷土史研究会恒例のバス旅行 ― 今年「フゴッペ洞窟と知られざる小樽市」をテーマに催行します。当研究会の野村武雄元相談役のご紹介により、北海道文化財保護協会 顧問の竹田輝雄氏にご同行およびご案内役をお願いしました。氏は小樽市在住で、道内における古代史の第一人者です。貴重なお話を伺えることと思います。昼食は、「みよ福」の寿司折をご用意。お誘い合わせのうえ、どうぞご参加ください！

- 実施日 / 9月21日(土) 8:30~16:30 手稲区民センター前発着
- 見学先 / 国指定史跡「フゴッペ洞窟」・小樽市総合博物館 運河館・長橋なえぼ公園(旧小樽苗圃)・手宮公園「尼港殉難者追悼碑」・国指定史跡「手宮洞窟」・市立小樽図書館 郷土資料室(河邨文一郎コーナーほか)・南樽市場
- 参加費 / 2,000円(昼食費・バス代金・資料代等)
- 定員 / 30名
- 申込み / 手稲郷土史研究会定例会にて回覧の申込書に記入、もしくは研究部：沖田部長(☎682-0755)まで、氏名、住所、連絡先をそえてお申し込みください。9月11日(水)締め切り。



フゴッペ洞窟  
(余市町 HP より転載)



★野村武雄会員が「子供盆おどり唄」の由来を紹介 「♪シャンコ シャンコ シャンコ シャシャンがシャン 手拍子そろえてシャシャンがシャン」 ― 可愛らしいお囃子が印象的な『子供盆おどり唄』は“夏の風物詩”としてすっかりお馴染みですが、実は北海道発祥、そして北海道限定であることをご存じでしょうか。7月下旬放送のテレビの情報番組の中で、手稲郷土史研究会の野村武雄会員が、その由来を紹介しました。『北海道教育史』の編纂に携わり『子供盆おどり唄』のルーツについても調査してこられた野村会員によると、昭和の終戦後、「子ども向けの健全で楽しい盆おどりを」という世論の高まりに応え、当時の北海道教育委員会などが中心となって制作が進められました。

レコードの発売は昭和27年。作詞は童謡詩人でもあった中学校教員の坪松一郎で、教鞭をとった江別市には現在、歌碑が建てられています。お囃子の「シャンコ」「シャシャン」は、開拓の苦労を共にした馬の鈴の音(馬そり)を表したものののだとか。『子供盆おどり唄』は“児童文化”の一つとして札幌周辺から産炭地へ、やがて全道へと広がっていきました。エピソードを知ると、盆踊りがより愉しめそうですね。「♪そよそよ風 牧場に街に～」で始まる曲に、皆さんも郷愁を誘われてみませんか。



★「手稲山口運河まつり」が開催されます 「山口運河」は排水溝としての役割と農産物や生活物資の水上輸送を担うために、「銭函・花畔間運河」の一部として明治30年に竣工しました。長さは約6.5km。その歴史を語り伝えようと、9月1日(日)10:00より、運河河畔および星置中学校(星置3条5丁目)を会場に『手稲山口運河まつり』が開催されます(同実行委員会主催)。手稲郷土史研究会の分科会「ホシボキの会」もこれに協力し、歴史講話「山口運河って、どんな運河？」(11:30より星置中学校)とミニガイドツアー(12:30より運河河畔)を予定しています。このほか当日は「運河丸」の舟乗り体験、スイカの早食い競争なども行われます。どうぞ足をお運びください。